エラブユリにかける

市来政敏

市来政敏は、一八九三年（明治二十六年）、現在の沖永良部、和泊町の農家に生まれました。生まれつき体は小さかったのですが、大きな夢と何事にも負けない心をもった人でした。

そのころの沖永良部は、自分たちで食べる量の作物しか作っておらず、お金にかえられる作物は、サトウキビぐらいで、生活が豊かとはいえませんでした。

「沖永良部島をもっと豊かな島にするためには、どうすれば

【市来政敏】（和泊町歴史民俗資料館）

【沖永良部島の位置】

よいだろうか。」

政敏は小さいころから、いつもこのことを考えていました。そのためには、せまい土地からたくさんとれる作物を育てることが大切だと思いました。そこで、政敏は小学校を卒業するとすぐに、エラブユリを作ろうと決心しました。よいエラブユリをたくさん作り、※外国に売って、沖永良部にお金が入ってくるようにしようと考えたからです。

その後、大人になった政敏は、エラブユリをたくさん作り、その球根を外国に売る努力をしました。沖永良部の人たちも政敏を見習い、エラブユリを作るようになりました。こう

【関連年表】

一八九三年　誕生

一九四一年
太平洋戦争が始まる。

一九四五年
太平洋戦争が終わる。

一九五五年　死去

※キリスト教を信じる人々の間で行われる復活祭でよく使われるため、外国に売ろうと考えた。

して、沖永良部の人たちの生活は、豊かになっていきました。

しかし、政敏が四十八さいのとき、※太平洋戦争が始まりました。日本は、戦争のために食べ物が足りなくなりました。政敏の家でも食べ物がほとんどなくなり、苦しい生活が続いていました。他の人たちは、エラブユリを作るのをやめて、いもを作るようになりました。

「他の畑には、いもが植えてあるのに、うちの畑だけ…。」

子どもたちは言いましたが、政敏は、

「がまんするんだ。戦争が終わったときの沖永良部のことを考えると、エラブユリは残しておかなければならない。」

※**太平洋戦争**
日本と、アメリカなどとの間に始まった戦争

【考えてみよう】
子どもたちに、「うちの畑だけ…。」と言われたとき、政敏はどんな気持ちだったのだろうか。

と言って、ユリ作りをやめませんでした。

また、軍からは、「田や畑では、食べ物だけを作れ。」と言われていましたが、強い※信念をもった政敏は、その命令をききませんでした。ある日、政敏の畑に、馬に乗った兵隊たちがやって来て、エラブユリの球根をつぶしたり、けちらしたりしました。「どうしてこんなことを…。」政敏は、つぶれた球根を拾いながらそう思いました。それでも、

「いつか、必ず戦争は終わる。沖永良部すべての人たちのためにも、わたしは、命をかけてエラブユリの球根を守りぬいてみせる。」

※信念
信じて疑わない心

【エラブユリ】

と球根のかけらを拾い集め、また一つ一つていねいに植えていきました。

一九四五年（昭和二十年）八月十五日、戦争が終わりました。政敏は五十二さいになっていました。島の人々は、生活を豊かにするために一生けん命働きました。しかし、生活はよくならず、どうすればよいかなやんでいました。人々は、「エラブユリの球根さえあれば…。どこかに球根はないだろうか。」と、島中をさがし回りました。

「この球根を、みんなで分けて育ててください。」

困っている人々を見た政敏は、自分が苦労して守り、育てて

【市来政敏之碑】

（和泊町）

【考えてみよう】

政敏が、エラブユリの球根を、人々に分けあたえたのはどうしてだろうか。

きたエラブユリの球根を進(すす)んで分(わ)けてあげました。

「ありがとう。これで生きていける。」

政敏は、人々にエラブユリだけでなく、生きる希望(きぼう)もあたえたのです。島の人々は、政敏に感謝(かんしゃ)し、分けてもらった球根をもとにしてユリ作りにはげみました。

こうして、政敏が言ったように、ユリ作りはまた、島を豊かにしていきました。エラブユリは海(うみ)をわたって、遠(とお)くアメリカやヨーロッパなどに送(おく)られるようになり、「花の島　沖永良部島」は、ますます有名(ゆうめい)になりました。今でも、エラブユリはまっ白な花をさかせ、沖永良部島を見守(みまも)っています。

【沖永良部島の海岸】

（写真協力：鹿児島県観光交流局観光課）